

まちの「たて」と「よこ」を丁寧についでいきたい。その想いから、店名を名付けた。

たてよこ書店が位置する新潟県上越市高田地区には、冬季の歩行者用通路を確保するためにそれぞれの家が屋根や庇を道路側に伸ばし、その下を歩けるようにした雁木造りが広がっており、その総延長距離は16kmほどで日本一だ。たてよこ書店も空き家となっていた築100年ほどの雁木町家を活用している。

2022年4月、人口流出が進み、空き家が増え続けていたまちに何かできることはないのかと考え、活動(物件探し)をスタート。何十年も前から青果店や呉服店を営む方々とコミュニケーションをとりながら、ともにまちの未来を語り、様々な物件をまわった。素敵なご縁をいただき物件が確定。まちのなかの拠点として、子どもから高齢者までが訪れられるように古本と少しの新材を扱うまちの本屋を立ち上げた。代表は当時学生であり、大きな予算はなかったため、看板や机はDIYで自作し、近所の方から使わなくなった桐たんすを譲り受けて本棚を制作。可能な限り費用を抑えながら、最小限での営業をスタートさせた。たった1人の学生でも、専門的な知識はなくても、まとまった予算はなくても、自分で手と足を動かして、様々な方の協力を仰ぎながらコツコツと積み重ねればお店は作れるのだ、ということを知者が何かを立ち上げることが少ない上越市で証明してみせたかった。

店名の由来は、雁木通りが「たて」に長い町家が「よこ」に繋がって形成されていること、高田地区は江戸

まちをり発見②

雁木町家を活用した地域コミュニティの形成

新潟県上越市 たてよこ書店



雁木下の土地は公共のものではなく建物の所有者の土地であるため、完全に有志で形成されている街並みである

時代から続く歴史ある城下町で、その長い歴史(時間軸)を「たて」と捉えて、これまでの歴史を引き受けて次の世代につないでいく、ここでの取り組みを地域住民とともに高田地区や上越市など「よこ」に広げていきたい、そういったこのまちの「たて」と「よこ」を丁寧についでいきたいという願いから「たてよこ書店」と名付けた。

雁木町家は昔ながらの建物で部屋数が多い。その構造を活用すべく、書店だけにとどまらず、様々な機能を持った複合施設として事業展開を続けている。

1つ目は先に述べた書店だ。まちのなかで文化的な時間を過ごせる場所として好評をいただいております、絵本や小説、エッセイ、新書や写真集、専門書など様々なジャンルを取り扱うことで、子どもから高齢者までの世代でも楽しむことができる。気軽に訪れることができるということで、放課後の小学生が宿題や読書にきたり、近所の高齢者がおしゃべりにきたりするなど居場所的な機能も果たしている。また、農業用リアカーを改造して移動式書店として、上越市で明治時代から続く朝市に出店を続けている。出店者がどんどん高齢化していく中で、生活味溢れる朝市の文化を残していこうと取り組んでいる。

2つ目は手紙を書くお店だ。近所にある老舗の文具店とコラボで手紙を書けるお店を運営している。普段使わないようなガラスペンや万年筆を使い、インクを楽しむための便箋に手紙をしたためる。送る相手は両親や友人でも未来の自分でも構わない。近所の事業者とコラボすることで1つの店舗だけではなくエリアと

して、楽しいまちをつくっていくことを狙っている。

3つ目は飲食店営業許可を取得したキッチン。複合施設として運営していく中で、集客のきっかけにもなる飲食事業は必須だった。現在はコーヒー屋やタコス屋が日替わりで使用しており、書店と並行して集客のきっかけとなっている。コーヒーを飲みに来たお客様が本も買っていったり、アスレチック(後述)で子どもたちが遊んでいる間に保護者の方がコーヒーやタコスでひと休みしたりと、複合施設としての相乗効果を発揮している。

4つ目は地域文化をテーマにしたセレクトショップ(2025年2月開店予定)だ。積雪量の多い地域だったことから発酵文化が盛んだったり、雪室を活用した商品が生まれていたり、古くから海運の拠点であった沿岸部には現在工場などが点在しているなど、様々な地域特性がある。そこに焦点をあて、地域住民にとっては改めてまちのことを知ることができ、地域外の住民にとっては上越市の様々なことが知れる。まちの玄関“の意味合いを持つショップを作っている。商品製造の裏側がわかる展示や、生産者へのインタビュー、定期的なトークイベントを開催するなど、地域文化をきっかけに様々な人が繋がる場を目指している。

5つ目は子どもたちの居場所だ。営利事業である前記4つと並行して非営利事業も進めている。母屋と別の離れの建物を改装しアスレチックを開設。2階建ての構造を維持し、地域の工務店などから木材の端材をいただき、こちらで用意した工具などを使って自由に工作ができるスペースも併設しており、体を動かす遊



朝市の風景。リアカーに本棚を取り付け、移動式書店として出店している



店内は新刊2割、古本8割ほどが並ぶ。絵本なども取り揃え、子どもから高齢者まで楽しむことができる

びや、頭を使ったクリエイティブな作業もできる。小規模な花壇も整備し、子どもたちとともに野菜や花の栽培も行っている。収穫した野菜は全て近所に配り、コミュニケーションのきっかけになっている。昨年は小学生が夕食前にサラダのトッピングとしてミニトマトの収穫に来たこともあった。このように営利事業と並行して進めることで持続可能性を担保しつつ、確実に居場所的な機能を果たすことができている。

以上が複合施設の主な機能とこれまでの成果である。代表が東京と2拠点生活をしながら運営していることもあり、近所の大学生や、まちの主婦など様々な立場の方が書店の店番を担っている。また、書店の常連になったお客様が自主的にイベントを開催するなど、少しずつではあるが、関わる人、まちを動かしていくきっかけになっている。

雁木町家は木造でなおかつ隣の建物と壁一枚で繋がっており、現代の感覚からすると決して「家」として住みやすいとは思えない。ただ、今私たちがこのまちで雁木の姿を見ることができているのは先人たちが大切に守ってきた賜物だ。それを現代には合わないからという理由で一蹴するのはあまりにも無責任であり、合わないのであれば合うようにチューニングして未来に繋いでいくことが私たちの役割だと考えている。まちの「たて」と「よこ」を丁寧に紡ぎ、雁木を中心にまちの企業、近隣の店舗、地域住民、多くの人を巻き込みながら、これからも雁木通りの未来をつくっていききたいと考えている。

(たてよこ書店 代表 堀田滉樹)